

卒業式校長式辞(3月5日)

校長 鈴木 健史

戦国大名の織田信長は、桶狭間の戦いの前夜、「人間（にんげん）五十年、化天（けてん）のうちを比ぶれば、夢幻（ゆめまぼろし）の如（ごと）くなり 一度（ひとたび）生（せい）を享（う）け、滅（めつ）せぬもののあるべきか^{※1}」と謡（うた）い舞ったと伝えられています。諸説あるものの、この頃の平均寿命は30歳から50歳位と調べることができます。戦後間もない1950年ころは概ね60歳位で、今は、女性が約87歳、男性が約81歳です。あと36年後、皆さんが50歳を超える2060年には、女性が約91歳、男性が約84歳になり、日本は、人口の4分の1が75歳を超え、世界で最も高い高齢化率となり、「超高齢社会」を迎えることが予想されています。

医療の発達、栄養状態や衛生環境の改善などによって、現在でも100歳を超えて生きる人が多くなっています。人生100年時が到来しています。ロンドンビジネススクールの教授、リンダ・グラットン氏は、著書「LIFE SHIFT（ライフ・シフト）」で、「寿命が今後伸びて行くにあたって、国・組織・個人がライフコースの見直しが迫られる」と提言しています。

これまで日本で想定してきた3つの人生ステージは、25歳前後までの教育を受ける期間、25歳から60歳までの仕事をする期間、60歳以降の余生を過ごす期間でした。しかも、この年齢で区切られていた人生のステージは、後戻りができない一方通行のものでした。

日本政府は、この問題に対して、「人生100年時代構想会議」を立ち上げ、幼児教育、高等学校の無償化、生涯にわたり周期的に学びとキャリアを繰り返すリカレント教育、大学改革を進めています。

人生100年時代の新しい生き方や働き方を考えた場合、「教育」「仕事」「引退」を一方通行で進むだけでは立ち行かなくなります。ただ単純な区割りではなく、その時々で「教育」と「仕事」、「引退」が絡み合い、それぞれのステージを自由に行き来できるマルチステージが必要になると言います。おそらく、戦後の日本経済を支えてきた、終身雇用制の維持は難しくなると考えます。「引退」も個人によって異なり、70歳を超えてなお、学び、働く人もでてくるでしょう。

中学校を卒業する皆さんは、まさに、この動きと流れのただ中にいます。社会のしくみがダイナミックに大きく変わる中で、現在の自分の学力を含む能力や資格等の位置を正しく理解し、途中、仕事を休んで学び直し、新しい資格を取ったり、知識や能力をアップデートしたりして、また、働くなどという生き方が求められるのだと思います。働く場所や学ぶ場所は、県内や国内とは限りませんし、ICT環境が更に進む少し先の未来では、オンラインでの学びやビジネスも今以上に普通のことになり、村上に居ながらにして日本中や世界とやりとりすることにもなるでしょう。

このような近未来の社会では、「アクション（やってみる）」「シンキング（考え抜く）」「チームワーク（協働）」が重要だと言います。他の人とのチームワークには、ストレスコントロール力が必須だそうです。時に、カウンセリングを受けたり、心理学的な学びも取り入れたりしながらストレスに対応することも求められます。

私は、その中でも一番大切なのは、自分が自分を理解してあげることだと思います。自分を見失うことなく、内なる自分と折り合いをつけながら、自分自身を肯定することです。また、他を思いやる、「優しさ」は過去も未来も一貫して人がもっている人としての大切な資質です。是非、自他を尊重する「優しさ溢れる人」になってほしいと思います。

結びに、村上第一中学校を巣立つ皆さんに、幸多からんことを祈念して、式辞といたします。

※1 室町時代の語りを伴う曲舞（くせまい）の「敦盛（あつもり）」の中の一節。意味は、「人の世の50年の歳月は、天上界の下天（げてん）の1日にしかあたらない短い期間であり、夢幻のようなものである。この世に生を受けて、滅びないものなどない。」

卒業式答辞

卒業生代表 K. H

二年生になると、「見て学ぶ番は終わり、これからは自分から行動する番だ」と、意気込んでいたものの、『自分のなりたい先輩像』に思うように近づくことができずにいました。そんな迷いの中で、たくさんの失敗を経験しました。その時、仲間はいつもそばにいてくれました。失敗を糧として、仲間と助け合い、高め合った時間が、私にとってかけがえのない財産になっています。

そして迎えた本年度。ついに最高学年となりました。一つ一つの行事に、『最後の』という一言がつく年です。ですから、学年のみんなが、大切に受け止め、どの活動を見ても、全力で行動する姿がありました。

これこそ正に、一中の三年生にふさわしい姿に思えましたし、一人一人が輝いて見えました。私は、この学年の仲間であられたことを誇らしく感じています。

三年生の思い出として、まずは、自分への挑戦の証である部活動。それぞれ最後の大会を迎えていきました。自分の納得する結果になった人や、そうでなかった人、様々だったと思います。しかし、部活で培ってきた経験は、必ずまた活かせるときが来るはずです。苦い思い出も大切に心にしまっておきましょう。

次に、双翼祭。今年は、感染症の影響なく、『声を出した応援』が可能になりました。そのため、夏休みから行っていた双翼祭の準備には、より一層熱がこもりました。迎えた本番では、今年の異例な猛暑により、二日間に分けて行う対策がとられましたが、そんなことも感じないくらいの盛り上がりが見られたのが印象に残っています。特に、三軍がそれぞれの個性を出きった応援。圧巻と言えるほどの一体感があり、みんなの笑顔がきらきら輝く光景は、忘れられない思い出です。

そして、麗華祭。午前中の『MDS ライブ』では、様々な出し物が見られ、いつもと違う一中の雰囲気とも相まって、とても楽しく終われたのが、運営した生徒会本部の私たちとしても、すごくうれしかったです。午後の『合唱コンクール』では、今までの練習の成果が最大限に発揮され、どのクラスの合唱も心を揺さぶる素晴らしいものでした。

三年間をこうして振り返ると、毎日がとても充実していたことを強く感じます。

中学校での生活は、決して楽なことばかりではありませんでした。楽しいことと同じくらい、つらいこともありました。ですが、その両方を経験した私たちは、絶対に以前より成長し、強くなっているはずです。

在校生のみなさん。これからの中学校生活の中では、たくさん悩む場面が出てきて苦しいときがあると思います。でも、その度に、一人で最適な答えを出そうとしなくてもいいんです。仲間を全力で頼って、自分にできることを一つずつ見つけていってください。私たちは、ずっと応援しています。

また、今まで私たちのことを、包みこむやさしさで、ご指導くださった先生方には、本当に感謝しています。個性あふれるこの八十一人が一つにまとまったのも、先生方のおかげです。私たちはこの一中から旅立ちますが、いつかまた会えたら、必ず成長した姿をお見せします。

そして、もう一人、私たちは感謝をお伝えしたい先生がいます。私たちが一年生の時に学年主任をしてくださり、途中でお亡くなりになった小出先生です。小出先生、見ていますか。あんなにやんちゃだった一年生は、今やこんなに成長し、卒業生になりました。これからは、それぞれ別の道

を歩むこととなりますが、小出先生と過ごした日々は忘れません。これからも、私たちのことを見守っててください。

そして、私たちが嬉しいとき、かなしいとき、辛いときに、いつもそばにいてくれたお父さん、お母さん。今まで強く当たってしまったり、反抗してしまったり、たくさん迷惑をかけてしまい、本当にごめんなさい。それでも全部受けとめ、支えてくれて、本当にありがとうございました。どんなことがあっても、お父さん、お母さんは私たちに愛情を注いでくれました。自分の進む道に不安を感じている時、背中を押して応援してくれました。私は、その愛情や安心感に幾度となく救われました。この想いを感じているのは、きっと私だけではないはずです。お父さん、お母さん、普段は少し照れくさくて言えないけれど、今日まで育ててくれて本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくおねがいします。

最後に、卒業生のみんな。本当は、『今までありがとう』なんて、まだ言いたくありません。それを言うと、もうみんなと笑い合ったり、泣き合ったりできるのは、今日が最後だということを、実感してしまうからです。みんなと過ごした日々は、私にとって宝物であり、みんなと出会えたことは、私の誇りです。これからは、みんなそれぞれの道を歩みます。時には、壁に突き当たるかもしれませんが、今までの三年間、苦楽を共に全力で乗り越えてきたこの八十一人なら、絶対に大丈夫。自分の道を信じて進みましょう。今まで本当にありがとう。必ずまた会いましょう。

結びになりますが、今日まで私たちを導いてくださいました全ての方々に、重ねて感謝申し上げます、皆様のご健勝と一中の更なる発展を祈念して答辞といたします。



卒業式送辞

在校生代表 T. T

肌を震わす冷たい風もいくらか和らぎを見せ、少しずつ春の香りが感じられるようになってきました。この佳き日に、村上第一中学校を卒業される三年生の皆さん、御卒業おめでとうございます。

先輩方は、今日まで学校のリーダーとして学校行事、委員会活動、部活動と真摯にまっすぐ取り組んでこられました。

記録的な猛暑に見舞われた中での双翼祭。どの軍のリーダーも、暑さをものともせず着実に準備を進め、勝利に向かって私達を導いてくださいました。競技、応援、パネル・・・先輩方が全力で取り組んだからこそ、全校生徒が心から双翼祭を楽しみ、「最高だ」と感じる事ができました。ファイナーレの05神楽では、勝敗や軍団をこえて、全校が『心をひとつに笑顔で踊る』事ができました。

麗華祭での午前のMDSライブでは、三年生を中心に、様々なパフォーマンスで全校を盛り上げてくださいました。ライブへの積極的な参加はもちろん、私達後輩にも声をかけ、声を出して盛り上げてくださった皆さんのおかげで、夢のような空間を創り上げることができました。

午後の合唱コンクールでは、緻密な練習に裏付けられた、素晴らしいハーモニーがホールに響き渡りました。皆さんの合唱は繊細かつ力強く、仲間同士でお互いを感じながら歌う、心温まる合唱でした。合唱を聞いたとき、鳥肌が立つほど心が震えたことを、今も鮮明に覚えています。

また、日常においても、新型コロナやインフルエンザの影響によって、委員会などの企画が制限されたときも、皆さんは工夫を凝らし、協力してみんなで楽しめる、素敵な企画を行ってくださいました。

今年度の生徒会が掲げたスローガン『つなぐ』に込められた、「感謝を忘れず、共に協力し、いつでも積極的に考え行動する」ことを、皆さんは常に実践してこられました。その結果、全校の気持ちを一つに「つなぎ」、それぞれの行事で最高の思い出を創り上げることができたのだと思います。

私達後輩をどんなときでも笑顔でリードし、何事にも真剣に取り組むこと、思い切り楽しむことの大切さを示してくださった先輩方の大きく逞しい背中を、私達は憧れの目をもってずっと見てきました。来年度、私達もその想いをつなぎ、どんな時でもひたむきに頑張る一中を創っていきます。

まだまだ未熟な私達ですが、これまで同様温かい目で見守り、応援してください。

名残は尽きませんが、お別れの時間が近づいてきました。三年生の皆さん、四月からはそれぞれが新たな道へと歩み出し、置かれる環境も変わります。楽しいこともたくさんあると思いますが、戸惑うこと、不安を感じることも、あるいは壁にぶつかることもあると思います。しかし、そんな時には、この村上第一中学校で過ごした日々を思い出してください。そこには、家族や地域の方々、そして先生方に支えられ、苦楽を共にした仲間がいました。この一中で得たかけがえのない出会いと、三年間で培ったたくさんの経験が、きっとみなさんの背中を押し、力となることでしょう。

最後になりますが、卒業生の皆さまのますますの御健康と、更なる御活躍を心よりお祈り申し上げ、送辞とさせていただきます。

